板東収容所新聞『ディ・バラッケ』の中のドイツ
—『ミンナ・フォン・バルンヘルム』の上演の意義—

垣　本　せつ子*

第一次世界大戦中、約五千人のドイツ人が、戦争終結までの四、五年間を日本で過ごした。中国の青島で日・英連合軍に敗れたドイツ帝国軍の捕虜たちである。

捕虜たちは当初、関東以西の12の地域に分散させられていたが、そこでの収容は仮のものであり、やがて6つの収容所に500人から最大1,100人程度まで入所する。この統合された収容所の中で日独交流史上、最も有名なのは徳島県鳴門市に現在も「ドイツ館」として跡をとどめる板東俘虜収容所である。同収容所は、松山・丸亀・徳島の三カ所にあった仮収容所を統合したもので1917年4月に捕虜受け入れを始め、ベルサイユ条約発効後の1920年2月8日に閉所された。この地で、ベートーベンの「第九」、「第五（運命）」が日本で初めて演奏され、その他にも当時、板東の町が捕虜たちを介して摂取した技術・文化は牧畜・製菓・西洋野菜栽培・建築・音楽・スポーツにまで及んだという。[1] 収容された俘虜たちの広範囲の活動を可能にしたものは、当時の収容所長松江大佐の寛容な態度と地元の人々のホスピタリティであったとされる。

俘虜たちは通常の戦争捕虜のように「有刺鉄線で編まれた二重の防御柵で夜も昼も歩哨に守られ、夜は照明が当てられる」[2] 不自然な生活をしていた。この収容所生活を内側から記録したのが『ディ・バラッケ（Die Baracke)』である。これは俘虜によって執筆・編集され、俘虜を読者とした収容所内新聞であり、ドイツ本国の図書館や赤十字へも送られた収容所当局公認のメディアでもあった。[3]

『ディ・バラッケ』は1917年9月から1919年9月まで収容所内の印刷所で印刷された。[4] 1918年11月の休戦条約後には、俘虜たちは順次解放されていったので、『ディ・バラッケ』の発行期間は収容所の生活が正規に営まれていたほぼ全期間に渡ると見て良いだろう。収容所内では同時期に『日刊電報新聞』も発行されていた。こちらは日本の新聞に掲載されたニュースを翻訳紹介し、『ディ・バラッケ』の方は、「有刺鉄線の内側の感動的な出来事についての折に触れての発言の場所として、記憶する価値があると思われるものを記録する場」であると「創刊の辞」の中で位置づけられた。戦争で傷ついた俘虜たちの心を「感動的な出来事」を通じて安定させることが『ディ・バラッケ』の狙いだったといえよう。[5]

しかし実際には『ディ・バラッケ』も収容所内部の出来事ばかりではなく、戦況分析や時事問題についての意見を掲載していた。従って編集も決して容易ではなかったであろうことが想像される。

*東洋大学国際地域学部；Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

ある号では投稿された原稿の掲載を見合わせるために矛盾にみちた釈明をしている。

> 3月には、15人の仲間から署名入りの原稿が寄せられた。そのうち「全く偏った政治記事」については、掲載を見合わせることになろう。多くの読者の「何らかの方向を持つすべての政治的プロパガンダ」を認めないということでは、新聞は収容所の本当の姿を提供できないのだが。もちろんすべての読者は、どんな記事ででも意見を表明できる。しかし我々は一面的なプロパガンダを目指す政治記事にとらわれたり、そそのかされたりしないようにしてきたし、これからもそうするつもりである。……（中略）……『バラッケ』は政治の場になってはいけない。しかし今日のような国際的に見て比類のない時代を恐れてあらゆる政治的な発言を控えるのは、我々が行っている最も重要なことの表現を避けることである。……（中略）……『バラッケ』に載った記事を見てみると、おそらくある政治姿勢が認められるのは帝国議会決議の転載だろう。我々はこの決議を間違いなく注目に値する文書と考えてきたが、転載したからといって決してそれを支持しようとしたわけではない。もちろん我々の「戦争概観」からも、著者の政治的確信を読みとることができよう。この「概観」が多くの好意的な支持を受けてきたからこそ、我々はそれによってどうにか収容所を支配している願望に対応してきたといえるのである。[6]

一般に、客観的な報道といわれる記事であっても伝えるべき事実の選択には何らかの世界観が反映される。戦争についての報道であればなおさら編者の立場は鮮明にならざるをえない。『ディ・バラッケ』の編者は自分の立場が約千人[7]の俘虜のそれぞれの立場の一つにすぎないことを前提として、風通しの良い意見交換の場を作りたいとしながらも、他方では多数の支持を受けることを記事の掲載の条件としているのである。特定の世界観にとらわれずに、しかも何らかの「多数」に支持された公式の立場を表明せざるを得ないという葛藤がそこに見られる。

分裂を生み出す政治の代わりに、編集者はまず共通の関心事として、収容所の外の板東町に目を向ける。[8] 創刊後間もない第三号には板東とその周辺の地誌が掲載された。その記事の背景には、上述したような板東収容所の寛容な方針がある。既に1914年に日独両政府間で確認された管理規則の中では、一定の条件の下に捕虜が外出し、外泊することを認める方針が打ち出されていた。[9] しかし、実際の運営は各収容所によりまちまちであり、収容所長である松江大佐個人の裁量にかかる部分が大きかったといえるであろう。大佐は、板東への統合が行われる前の徳島収容所の所長でもあり、ここを視察したジーメンス東京支社員は、「徳島では希望に応じて毎日散歩が行われた」と報告している。[10]『ディ・バラッケ』も「日本側監督当局は我々に定期的な散歩・遠足の希望を与えた」と述べ、[11] 板東町の案内記事には、周辺の地図が添えられた。

板東の俘虜たちの散歩はしかも個人的な運動の範囲にとどまったのではない。『ディ・バラッケ』の掲載している収容所日誌には団体での散策及びハイキングが記されている。開所間もない1917年5月27日（聖霊降臨節）には大麻比古神社と霊山寺に団体で出かけているが、その後も平均して一ヶ月に一回はグループで遠出を楽しんでいたようである。特に霊山寺は四国八十八カ所の霊場巡りの「一番」として『ディ・バラッケ』紙面で紹介され、[12] 後にここで俘虜たちによって「ドイツ展覧会」が催される。もっと大がかりな遠足となったのは撫養町（鳴門市）訪問である（1917年11月30日）。撫養については『ディ・バラッケ』の第三号「板東の周辺」の中で、塩田・鳴門海峡・大凧と幾つかのトピックが取り上げられ、遠足が終わってから、大凧の紹介が改めてなされた。[13]

俘虜たちの一部はもともと日本やアジアへの関心を持っている人々であった。収容されていた約

千人の俘虜の内、正規の軍人はたった99人しかいなかった。これに対して、分類された職業別人口の内、一番多かったのは303人の商人である。[14]『第九の里　ドイツ村』によれば、青島で戦った約五千人のドイツ兵力の約三分の二は開戦と同時に東アジア各地から急募された義勇兵だったという。俘虜たちの中には日本を活動の拠点において、青島へ出兵した後、再び日本へUターンした人も混じっていた。[15] また休戦条約後の収容所閉鎖にあたっても、245名が日本、中国及びインドネシアに残った。[16] このグループの人々は日本やその他の東アジア諸国を生活の場として意識していたため、不自然な俘虜生活にも比較的容易になじみ、慰藉を見いだしたのかもしれない。『ディ・バラッケ』第6号は、収容所への入所後、半年間の生活を振り返って、「有刺鉄線が我々と外界の間にある。しかし、棘はだんだん鋭さを失」い、[17] 俘虜たちは「多面的で変化に富んだ」生活を営んでいると述べた。[18] 収容所の周囲に向ける視線は、公式的な立場ということを差し引いても、このように楽観的で平静なものとなっている。

しかし、閉ざされた収容所生活の内部に目を向けたとき『ディ・バラッケ』も影の部分を取り上げざるをえなかった。結局、収容所生活についての肯定的な評価も、「暗い影の生活からどれほど明るい光の面を獲得できるか」に尽きたのである。[19] 第一次世界大戦前に中国にいたため、俘虜として板東に収容されたヨハネス・バルト氏は1984年に出版された回想録の中で、収容所生活でつらかったこととして、ドイツの軍隊生活が収容所内においても継続していたことを挙げている。水兵であったバルト氏は同国人の下士官によって教練の命令を受けたり、服装検査をされたりしたのである。[20] そのような際だった苦痛は別としても、異郷で不自然な生活をしている意識は共通であった。収容所内最大のイベントとなった「ドイツ展覧会」の報告者は、会場となった霊山寺が「異国風の形」で「我々の目を引きつけはするが、我々がどんなに遠く故国からへだったているかをも思い出させた」と述べた。[21] 人の心を和ませる宗教のシンボルがここでは逆に異郷を強く意識させることとなったのである。

収容所内のすべてのドイツ人にとって、ということは『ディ・バラッケ』にとっても最大の関心事は当然のことながら現実のドイツ情勢であった。[22] しかし、ドイツ情勢についての論評は政治論争の種でもあったので、これと並行して、収容所内でのスポーツや音楽、演劇、文芸が収容所内の志気を高めるために常に取り上げられた。特に演劇は『ディ・バラッケ』にとって精神的な価値の高いものであった。

> バイエルンに白樺の森があるかどうか、1850年の洋服屋や仕立て女が例えば1912年の流行を予見したかどうか、についてあんまり深く考えるべきではない。舞台発音だけが使われることや、各州の方言や方言の自由のための学校が収容所内に創設されることを要求すべきではない。大切なのはここでできるだけ良いもの、多くのものが舞台で上演されることである。[23]

『ディ・バラッケ』は第二号から収容所内の劇団の上演記事を掲載していった。板東収容所開設の二ヶ月後には、収容所内にしつらえた舞台で第一回目の劇が上演されたのである。これほど早く上演が実現したのは、収容所統合前の各収容所にも既に劇団活動があったからであるが、俘虜の一

人であるライポルト氏の覚え書き「第六中隊の演劇」によれば、松山収容所での『ミンナ・フォン・バルンヘルム』の上演は収容所長の許可を得ずに行われたという。[24] またしても板東収容所当局の好意的な態度が演劇活動にも幸いしたといえるだろう。劇団は軍隊の組織を単位として編成され、演出指導にはゾルガー予備少尉とダニエル水夫があたった。[25] ゾルガー少尉は『ディ・バラッケ』の編集者でもあった。

1917年11月6日から3回にわたってレッシングの『ミンナ・フォン・バルンヘルム』が板東収容所で第6中隊バルクホールン＝ピーツカー・グループによって上演された。[26] これについて約一週間後に『ディ・バラッケ』が報告を書いているが、冒頭の「批評はやめておこう」が示唆しているように、上演についてではなく、作品そのものを概説したものになっている。[27] このことは上演の技術面が低レベルであったという意味ではない。霊山寺での「ドイツ展覧会」にこの劇の小道具と舞台衣装が出品されていることからも、今日残されている舞台のスケッチからも、戯曲の生まれた18世紀の雰囲気に近づく努力がなされたことがわかる。[28]

『ミンナ・フォン・バルンヘルム』は『ディ・バラッケ』が「最初の国民喜劇」と位置づけたように、[29] 1767年の初演以来今日まで、少なくとも本国においては繰り返し上演されてきた古典喜劇である。プロイセン、イギリス対オーストリア、フランス、ロシアで戦われ、植民地まで巻き込んだため、最初の世界大戦ともいわれた七年戦争を勝者として切り抜けたプロイセンの戦後を描いた劇であり、ドイツ演劇における「兵隊もの」として、ビュヒナーの『ヴォイツェク』やボルヒャルトの『戸の外で』と比較される。しかし、ドイツにおける古典としての知名度は圧倒的であり、第二次世界大戦後の瓦礫世代を代表したボルヒャルトの『戸の外で』が「60回以上」の上演回数であるのに対して[30]『ミンナ・フォン・バルンヘルム』は1949年から79年まで旧西独地域だけで6,766回の上演回数を数えた。[31]

18世紀という遠い時代でありながら、『ディ・バラッケ』第8号の論評者にとって非常に近い存在であった登場人物は、プロイセンの元少佐テルハイムと、ザクセンの貴族令嬢でテルハイムの婚約者、ミンナ・フォン・バルンヘルム及びその従者たちである。背景には、ザクセン王国がオーストリア側についたため、プロイセンがザクセンに侵入することで、七年戦争が開始されたという経緯がある。舞台は平和が戻ってくると同時に、職にあぶれ宿にたむろする軍人であふれかえったプロイセンの首都ベルリンであり、そのような軍人の一人としてテルハイム元少佐も今にも宿の主人から追い出されそうな場面から芝居は始まる。テルハイムは、七年戦争後、占領地ザクセンでの徴税について瀆職の疑いをかけられ不名誉な退役をしたため、無気力になり宿にくすぶっていたのであるが、彼が追い出された部屋へ偶然、ザクセンからやって来たミンナ一行が投宿する。そして再会した喜びも束の間、失意のテルハイムはミンナに「自分は結婚相手としてふさわしくないから」と婚約の取り消しを伝える。こうして、軍人の「名誉」か「愛」かという葛藤をテーマとして芝居は展開するが、この男女を隔てるものは、二人の出身地の地域の対立でもある。

ゲーテによればこの作品は「七年戦争の落とし子」であり、「特別に時事的な内容であったため予想もつかぬ影響を与え続けた」という。[32] 戦争と平和、憎悪と親愛の間を揺れ動いていた当時のプロ

イセン人及びザクセン人の宥和は、歴史上、分裂状態の続いたドイツにとって今日にも通じるテーマである。それ故「時事的」“temporär”ではあっても、同時に「北ドイツで生まれた真にドイツ的な内容」“von vollkommenem norddeutschem Nationalgehalt”[33] をもつ作品となりえたのであった。

1918年の板東収容所の住民はドイツ帝国民のみであった。しかし、プロイセン州の優位は『ディ・バラッケ』の論評中の、「我々実直すぎるプロイセン人」という表現にも見られる。[34] プロイセン州出身者600人は収容所内で最大のグループであった。これは俘虜の半数以上にあたり、ザクセン州の71人がこれに続く。[35] 中世におけるドイツ騎士団の東方進駐地を領土に加えて拡大したプロイセンは、とりわけ18世紀において人口に占める軍人の割合が異常に多い国であり、プロイセン軍人の堅苦しいが、「廉直・実直（“brav”）」な性格はそのままプロイセン気質として1918年の「我々」にも受け入れられたのである。他方、「石の剣」という意味を持つ古代ゲルマン部族の子孫であるザクセンには、[36]「経済的な豊かさに基づく、活気に溢れた精神」があった。[37] ザクセンもプロイセン同様、18世紀に発展した国である。石炭・褐炭・鉄・銅といった資源に恵まれた上、1710年にマイセンのアルブレヒト城にヨーロッパで最初の陶器工房が設営され、陶磁器生産が産業として成功する。このような経済的なゆとりのある「ザクセンのサロンの軽やかで自由な雰囲気」[38] からやって来てミンナと同じ20才の侍女フランチェスカにとって、むさ苦しいテルハイムは「すっごくプロイセン」[39] である。戦争状態にあった両国人の対立にはもっと厳しいものがあったにちがいないが、劇中ではこうして地域の気質が男性と女性の感覚の違いと絡んで、穏やかな笑いを誘う。

自分は結婚するには値しないから婚約を破棄すると述べたテルハイムを、令嬢ミンナは愛し続ける。しかし、婚約者の助けを拒むほどの失意とは自己愛が変形した「許し難い誇り高さ」でもあった。[40] ミンナはテルハイムにお灸を据えるため、侍女フランチェスカと芝居を打って、自分もテルハイムが原因で家を勘当された身の上だから「あなたに値しない」という切り札を返す。零落の原因が自分であると思いこまされたテルハイムはそこで突然、不名誉に打ちひしがれていた己の愚かさに思い至る。

> この地に縛られる理由はないのです。これからは、私に降りかかった不正には軽蔑だけをくれてやります。この国が世界なんでしょうか。お日様はここだけで昇るんでしょうか。私が行ってはいけない土地がどこかにあるというんでしょうか。[41]

地域に固有であるとされた気質や職業の倫理とされたものが、広い人間愛によって相対化され、心が自由に飛翔する。啓蒙作家レッシングの主張が明快に現れる箇所であり、『ディ・バラッケ』が「テルハイムよ、君の負けだ、愛の勝利だ」と喝采するくだりである。[42]

ビュヒナーの『ヴォイツェク』やボルヒャルトの『戸の外で』では、軍人はプロレタリアートであり、戦争を終えても出口のない悲劇が待ち受けていた。『ミンナ』の主人公テルハイムは貴族である上、ミンナとの愛は戻り、最後にはプロイセン国王から名誉回復を伝える親書も届いて、めでたい結末を迎える。しかし『ミンナ』の戦争観とて他の二作と無縁ではない。軍人の名誉を蹴るときに、戦争そのものの意味も改めて問われることになるのである。『ミンナ』が提示するのはあるべき

世界像や規範ではなく、男性 vs. 女性、プロイセン vs. ザクセン及び軍人 vs. 宿屋の主人といった所属集団の価値観が錯綜する中で、何とか、動いていく世界である。それは、自分自身、ザクセンの出身でありながら、ベルリンで定職を得るために苦労した作者レッシングの人生哲学でもあった。

板東収容所の一時的であり不自然な拘禁生活の中では、ドイツ古典作品が提示した開かれた価値体系こそが精神に安らぎとゆとりを与える糧となったことであろう。俘虜たちが自分たちの帰郷とその後の生活を夢見ながら観劇したであろうことは、『ディ・バラッケ』のコメントに窺える。ミンナがテルハイムの友人を名のるいかさま師シュヴァリエ・リコに告げるセリフに自分たちの今を重ね合わせるのである。

私たちもこう言おう、「これで最後ですよ、あなた、これで最後です」、そして故郷の大地に帰るのだ。[43]

戦争が暮らしを切り捨てた思想を育むものであるとするなら、戦争を終えた兵隊の物語とは結局、暮らしと思想が再び一つになれるかどうかを問うものに他ならない。テルハイムは「名誉」を捨てることで新しい生活を見いだしたが、第二次世界大戦を終えた『戸の外で』の帰還兵は意味のない戦いを終えた後で、生産性のみを志向する日常生活からも閉め出される。

『ミンナ』の上演は、18世紀以来の「世界市民」の概念がドイツの教養を担っていることを確認することでもある。[44] 最近の例を待たずして、分裂国家の克服がドイツの宿命的な課題であり、そのプロセスの中にドイツ精神史があるといっても過言ではないからである。『ディ・バラッケ』ができるだけ多数の俘虜たちの意見の表明機関であろうとしたことも同じ伝統に基づいているといえよう。発行期間中の執筆者は337人[45] にのぼり、個々人の多様性を包摂するという編集部の意向は一応実現された。[46]

〔注〕

1) 『「第九」の里 ドイツ村』林啓介著、平成5年、井上書房。

2) Die Baracke, I, 6.1.1918 Nr.15 "Stadt und Festung Bando" S.1（板東。町と砦）収容所新聞『ディ・バラッケ』は現在三巻にまとめられている。第一巻：1917年10月—1918年3月。第二巻：1918年3月—9月。第三巻：1918年10月—1919年3月。1919年4月から9月までは分冊。OAG ドイツ東洋文化研究協会所蔵のものを利用させていただいた。第一巻には頁の通し番号が欠けているため、各号の中での頁を、第三巻には通し番号がついてるため、通し番号で頁を記載する。なお、翻訳は第一巻について、出版されている。『ディ・バラッケ 第1巻』鳴門市ドイツ館資料研究会訳、平成10年、鳴門市。

3) Die Baracke, I, 18.3.1918, Nr.23.

4) 1919年4月から9月までは月刊。収容所では労役は課せられず、俘虜たちは本国からの送金でそれぞれの趣味を楽しむことができた。新聞発行も俘虜たちの分担金で運営された。

5) Die Baracke, I, 30.9.1917, Nr.1, S.19.

6) ebenda, 24.8.1918. Nr.26, S.9 "Grundsätzliches"（基本的なこと）。

7) 1918年9月には板東収容所に1028人収容されていた。『「第九」の里 ドイツ村』41頁。

8) 板東町は大正4年2月1日に村から町へ改称した。前掲書、30頁。

9) 外務省外交資料館所蔵「日独戦争ノ際俘虜情報局設置並独国俘虜関係雑纂」第一巻 "Vorschrift über den freien

Spaziergang der Kriegsgefangenen und über deren Logierung in Privathäusern"(1914年)

10) 同資料、"Bericht. Siemens-Schuckert-Denki-Kaisha, Tokio, den 25.10.1915. N.Drenckhahn." S.8

11) Die Baracke, I, 14.10.1917. Nr.3, S.7. "Die Umgegend von Bando"（板東の周辺）。なお、この記事の効果というわけではないが、収容所開設期間には、4件の逃走未遂事件が起きている。

12) Die Baracke, I, 14.10.1917. Nr.3, S.11. "Die Umgegend von Bando"（板東の周辺）。

13) Die Baracke, I, 13.1.1918. Nr.16, S.2ff. "Muya"（撫養）。

14) Die Baracke, III, 16.2.1919. Nr.20, S.451. "Wir Bandoer". 全体の構成は労働者49人、商人303人、自由業32人、陸軍・海軍99人、官公吏21人、その他515人となっている。

15) たとえば、Erich Rumpf氏。Erich Rumpf (1888-1949) in Spannungsfeld der deutsch-japanischen Kulturbeziehungen. Hrsg. von Hartmut Walravens. Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin, VCH Verlagsgesellschaft, Weinheim, 1989.

16) 『「第九」の里　ドイツ村』、44頁以下。

17) 4.11.1917. Nr6. S.12. "Lagerplauderei"（収容所漫筆）。

18) ebenda.

19) ebenda.

20) Johannes Barth : Als deutscher Kaufmann in Fernost, Erich Schmidt Verlag, Berlin, 1984, S.53.

21) Die Baracke, I, 17.3.1918. Nr.25, S.7.

22) 『ディ・バラッケ』も、各人の自由な発言を促した後で、「編集部が断固として支持し、すべての方々が賛成してくれると確信している唯一の政治原則は、ドイツ、それに優るものはなし、だけである」と精神的な絆としての「ドイツ」を強調している。a.a.O.24.8.1918. Nr.26, S.10 "Grundsätzliches"（基本的なこと）

23) 4.11.1917. Nr.6. S.14. "Lagerplauderei"（収容所漫筆）

24) Ed. Leipold : Theater K.6., 1919, S.12　翻訳：第六中隊の演劇、富田弘訳。鳴門市ドイツ館所蔵。

25) 『「第九」の里　ドイツ村』、98頁。

26) Gotthold Ephraim Lessing : Werke. Erster Band, Carl Hanser Verlag München, 以下、省略して『ミンナ』と表記する。

27) Die Baracke, I, 18.11.1917, Nr.8, S.9. "Zur Aufführung der Minna von Barnhelm"（「ミンナ・フォン・バルンヘルムの上演について」）。

28) Die Barache, III、1919年9月号。Bühnenbilder in Bando, Saal 及び Das Zimmer des Fräuleins.

29) Die Baracke, I, 21.10.1917, Nr.4. S.

30) ヴォルフガング・ボルヒャルト、『ボルヒャルト全集』、小松太郎訳、1972年、早川書房、525頁以下。

31) Heiner Feldkamp : Gotthold Ephraim Lessing. Minna von Barnhelm oder das Soldatenglück. Kommentar, Inter Nationes, Bonn, 1992. S.242.　板東収容所以外でも松山収容所、大分収容所で上演されている。

32) Johann Wolfgang von Goethe : Aus meinem Leben. Dichtung und Wahrheit. Hamburger Ausgabe. München, 1981. Bd.9. S.281.

33) ebd.

34) Die Baracke, I, 18.11.1917, Nr.8, S.13. "Zur Aufführung der Minna von Barnhelm"（「ミンナ・フォン・バルンヘルムの上演について」）

35) Die Baracke, III, 16.2.1919, S.459. "Wir Bandoer"（我々板東人）

36) Jacob und Wilhlem Grimm : Deutsches Wörterbuch, Deutscher Taschenbuch Verlag, 1991. Bd.14, S.1604. 及び、石川光庸：『匙はウサギの耳なりき　ドイツ語源学への招待』白水社1993、59頁。今日でも「(スレート工事用の）なた」という意味の sax という英語の語彙があり、何よりも「アングロ・サクソン族」のサクソンである。なお、今日のドイツではプロイセンの州名は消滅したが、ザクセンの方は「ザクセン州」、「ニーダーザクセン州」、「ザクセン＝アンハルト州」と3つの州名に使われている。

37) Die Baracke I, 18.11.1917, Nr.8, S.11.

38) a.a.O., S.13.

39) Gotthold Ephraim Lessing: Werke. Erster Band, Carl Hanser Verlag München, S.661, III. Aufzug, 10. Auftritt.

40) a.a.O., S. III. Aufzug, 12. Auftritt.

41) a.a.O., S.690., V.Aufzug, 5. Auftritt.

42) Die Baracke I, 18.11.1917, Nr.8, S.15.

43) a.a.O., S.13.

44) Goethe Handbuch Band 4/2: hrsg. von Bernd Witte, Theo Buck u.a., J.B.Metzler, Stuttgart, Weimar, 1998, S. 1133ff.

45) 『「第九」の里 ドイツ村』、109頁

46) 収容所には排他的なナショナリズムもあった。ドイツ軍に入隊していたスラブ系の捕虜他5名がどうしても集団生活になじめないという理由で隔離収容された。『「第九」の里 ドイツ村』、133頁。

Gedanken an Deutschland in der Lagerzeitung des deutschen Kriegsgefangenenlagers Bando "Die Baracke"
—Zur Aufführung der "Minna von Barnhelm"—

Setsuko Ichida-Kakimoto

Während des Ersten Weltkriegs unterlagen die Deutschen in Tsingtau den Engländern und Japanern. Etwa 5,000 deutsche Kriegsgefangene wurden als Kriegsgefangene nach Japan gebracht und verbrachten dort 4 bzw. 5 Jahre bis zum Ende des Krieges. Das Kriegsgefangenenlager Bando ist dadurch bekannt geworden, daβ das Lager-Orchester zum erstenmal in Japan Beethovens 9. Symphonie aufgeführt hat. Die Aktivitäten der Gefangenen in Bando dokumentierte die Lagerzeitung "Die Baracke".

Die Redaktion der "Baracke" erklärte, daβ jeder dort seine Meinung äuβern könne, daβ die Redaktion sich aber das Recht vorbehalte, dafür zu sorgen, daβ die Ansicht der Mehrheit wiedergegeben wird. Diese Haltung führte zu Schwierigkeiten, weil es in politischen Fragen Meinungsverschiedenheiten gab. Um Streit zu vermeiden, bemühte sich die Redaktion, alltägliche Themen auszuwählen. Zum Beispiel war die Umgebung des Lagers ein gutes Thema. Die Gefangenen durften mit Erlaubnis spazierengehen. Deshalb war dieses Thema für sie interessant. Ein Drittel der Gefangenen waren Kaufleute von Beruf, und zwei Drittel waren in Ostasien ansässig und waren 1914 bei Kriegsausbruch dort zum Militärdienst einberufen worden. Man wollte sich das Leben im Lager angenehm gestalten und bemühte sich, die asiatische Kultur kennenzulernen.

Während die Artikel über Japan die Neugier befriedigten und eher zur Abwechslung dienten, zeigten sich in Beschreibungen des Lebens im Lager oft Ärger, Klagen und innere Unruhe. Sport, Musik, Theater und Gedichte hatten die Funktion, die Moral im Lager aufrechtzuerhalten. Etwa einmal im Monat gab es Theateraufführungen, und nach jeder Aufführung erschien eine Kritik. Besonders aufschluβreich ist die Besprechung der Aufführung der "Minna von Barnhelm" in der "Baracke" Nr. 8 vom 18.11.1917., weil der Kritiker seine Lage im Stück widergespiegelt sah.

Diese Komödie von Lessing, die die Nachkriegszeit nach dem Siebenjährigen Krieg darstellt, entsprach den Erwartungen der Gefangenen im Lager. In dem

Stück kommt ein Major außer Dienst mit Minna, seiner Verlobten, wieder zusammen, und im Krieg verlorene Ehre wird ganz am Ende wiederhergestellt. Aber nicht nur das Glück für das Liebespaar, sondern auch die Probleme, die Lessing in diesem Stück aufgriff, waren im Lager von allgemeinem Interesse. Bei Lessing sieht man: wenn man sich nach dem Krieg in seine angestammte Welt wieder einleben will, muß man seine Wertvorstellungen aus dem Krieg einmal abstreifen und sein Leben und seine Gedanken je nach dem, was einem im Frieden begegnet, korrigieren können. Diese Botschaft gründet sich auf Lessings Optimismus, sich aufeinander einstellen zu können, egal ob man Preuße oder Sachse, Mann oder Frau, Soldat oder Wirt ist.

Obwohl die Gesellschaft im Kriegsgefangenenlager Bando nach den militärischen Rangen hierarchisch strukturiert war, verband einen die Aufführung dieses Stückes mit der deutschen Tradition in der Geistesgeschichte, die Zersplitterung zu überwinden, die die deutsche Geschichte beschattete. Der Versuch der Redaktion der "Baracke", Einheit in der Verschiedenheit zu suchen, beruht auf demselben Gedankengut.

Key Words: Weltbürger, Lagerzeitung, Aufklärung